

## これからの京都大学

### 欠けている研究領域をめぐって—東洋・アジア音楽研究の拠点という夢想

遠藤 徹(平成元年 文学部卒)

京都大学を卒業して既に二十年近くの歳月がながれ、現在は五百キロ離れた東京に住んでいるが、遠くから見ていると、京都大学の個性を作り出している基は、やはり京都の土壤が大きな要素を占めているように思われてならない。京都は千年の古都であり、平安時代以来、内外から数多の俊英がここで学問をし思索をめぐらし、有形無形の文化遺産を残してきた。京都大学はそうした土壤に誕生し、前代までの遺産を養分にし、新たな学問の種を移植したり、創造したりしつつ、百年を超える近代日本の学問の歴史に一つの個性を作り上げてきたのは周知のとおりである。しかしながら京都の土壤にありながら京都大学で未だ開花していない分野もある。その代表的なものが筆者が研究領域としている音楽学である。この機会に日頃思うところの夢想を記してみたい。

## 京都の土壤と東洋音楽

千年にわたり都のあった京都は、日本の伝統音楽の過半の発祥の地でもある。王朝の雅楽、天台・真言の声明(仏教音楽)、能楽の大成は、いずれも京都を舞台にしている。また、出雲阿国の歌舞伎踊りに端を発する歌舞伎や八橋検校にはじまる地歌箏曲の発祥も京都の地であった。

わけでも、筆者が主たる研究課題にしている王朝の雅楽が、平安中期に大成して以降、江戸末期に至るまで京都に中心があったことの意味は大きい。百万遍知恩寺に楽家の一である辻家の墓所があるように、楽舞を世襲で伝えた伶人の過半は江戸末期まで京都に居住した。伶人は宮廷の儀式の奏楽につとめるほか、公家をはじめ、江戸期には一般人にも雅楽を教えた。そのため京都では民間の雅楽が今日も根を張っている。湯川秀樹博士は自伝『旅人』の中で、子供の頃に裏の家から笙の音色が聞こえたことを述べ、その体験を「そのひきこまれるような笛の音の中で奇妙な幻想におちてゆくようであった」と記しているが、日本人初のノーベル賞の頭脳は雅楽の音色で研ぎ澄まされたものと私は勝手に考えている。伶人は伝承の一方で総じて研究にも熱心であった。世に三大楽書といわれる『教訓抄』『体源抄』『楽家録』の中の、後二者は京都で生まれたものであるが、そのほかにも京都で著された楽書は枚挙にいとまがない。江戸時代になると雅楽に接する機会を得た儒学者も雅楽研究に手を染めるようになった。熊沢蕃山の『雅楽解』、伊藤東所の『楽考』など

はその一端である。

仏教音楽の中核をなす天台声明も京都の育んだ音楽遺産の一である。天台声明は洛北大原に本拠をおいたが、大原は中国の梵唄の聖地で「けわしくて大魚の姿あり」といわれた山東省東阿県の山に準えて魚山と呼ばれた。ここでは、声明の実践の伝承とともに、理論研究も進められ、中世には湛智による独創的な理論書の『声明用心集』を生み、近世には声明研究の集大成として覚秀によって全百八十六冊からなる魚山叢書が編まれているのである。

日本の伝統音楽ばかりではない。日本の音楽史は中国音楽史の展開の波動を何回も受けて進行したが、京都にはそれらの痕跡が幾重にも重なって沈潜している。雅楽や天台・真言声明はもとより隋唐音楽の遺産に基づくものであるが、宇治の黄檗宗万福寺にこれらとは全く別に明代の声明が伝承されているなどはその好例である。文献史料も多彩である。世界最古の琴譜といわれる「碣石調幽蘭」(国宝、唐代)は京都の神光院に伝来した(現在は東京国立博物館蔵)。その外にも、世界で唯一の遺存例であるインド系五絃琵琶の楽譜「五絃琴譜」(陽明文庫蔵)、明代黄佐撰の『楽典』(京大蔵)、清代の『御製律呂正義』(京大蔵)など、東洋音楽史上の貴重な文献史料も数多く伝来しているのである。

## 実践としての音楽、学としての音楽

さて、音楽には元来、実践としての側面と学としての側面とがある。前近代の日本、殊に京都には、実践の伝承はもとより、学としての音楽の伝統もたしかに存した。このことは上述の伶人が残した研究、儒学者や僧侶の残した研究に明らかであるが、さらに加えれば、元禄時代に独自に十二平均律を計算して『律原發揮』を著した中根元圭は京都で活躍した暦算家であったし、『平安人物志』によれば弓削刑部、河村四明らが音律に長じた人物として名が通っており、市井に音律研究が浸透していたことも知られるのである。

しかし近代日本は、江戸時代の末までに育ってきた音楽研究の幹を、大学の学問体系に植え替えることをしなかった。これは一面では明治期の西洋音楽導入の影響とみえるが、それは必ずしも正鵠を射てはいない。西洋では、東洋以上に、音楽には実践と並んで学の側面があることを重要視しており、中世の自由七科に幾何学、天文学などと並んで音楽が含まれていたことは有名であるが、そうした伝統をひいて、西欧の総合大学では現代でも実技とは別に音楽学の講座があるのが普通である。そして総合大学の音楽学では、多くは音楽史を根幹にした研究が行なわれ、音楽学校等で行なわれる実践としての音楽とは一線を画している。しかし近代日本の西洋音楽受容は、実践の側面に偏ってしまった。このことは

東京音楽学校が実践中心の専門学校として始まり、そこに楽理科(1949年設置)が設けられるのが戦後の東京芸術大学開校後に下ることに端的に示されている。音楽学者の酒井諄氏(京大卒)は、これを「西洋音楽の導入期における一種の踏み外し」と呼んだ(『音楽の体験と思索』)。一方、大学における音楽学の講座は、当初は一切設けられなかった(今日でも総合大学には大阪大学文学部(1976年設置)をはじめ僅かの大学にしか置かれていない)。すなわち近代日本の大学は、前近代の音楽研究の蓄積を移し替えなかったのみならず、西洋の音楽学の移植も十分に行なっておらず、結果として音楽を専ら実践の問題とする認識を蔓延させることになってしまった。私見では、西洋音楽に感覚的な理解のない明治時代に、観念的に西洋の音楽学を大学が取り入れることはたしかに無理があったと思う。しかし、そこで日本東洋音楽史を基幹にした近代的な音楽学を創造して、京都の地にある京都大学などが率先して研究に取り組んでいれば、現代の日本の音楽文化の有様もよほど異なったものになっていたのではと想ったりもする。(その萌芽は青木正兒氏の研究などに見られたのだが)

ともあれ、戦後になって東京芸大に楽理科が設けられて以降、ようやく音楽大学や教員養成大学の音楽科の中には音楽学の研究室が漸次設置されることになり、一応大学の中に音楽学が取り込まれるようになりはした。しかし、その実態は、学としての音楽は実践としての音楽の附録に過ぎないのが現状といわざるを得ない。また、言うまでも無く、西洋音楽を中心にして作られたこれらの大学には、日本東洋音楽の伝統はほとんど継承されていない。筆者は、京大文(国史)を卒業後、東京芸術大学の大学院で音楽学を学び、現在は東京学芸大学で音楽学を講じているが、実践の周縁という現状の日本の音楽学とは異なる、かといって西洋で発達した音楽学とも異なる、独自の主体性をもつ日本発の音楽学が構想されてもよいのでは、という鬱積した思いが常に燻っている。音楽の研究は、音楽の歴史研究やその叙述、音楽思想の掘り下げ、音楽の作りや組立ての解析、種々の民族間の様式の比較、個人や社会に及ぼす音楽の作用、さらには失われた曲目に古楽譜研究に基づいて新たな命を吹き込む復曲等々、広くかつ深い。これらは決して音楽実践との関わりの中でのみ存在意義があるという性質のものではなく、本来は歴史学、文学、哲学、心理学、民族学、物理学等々、多くの学問分野に囲まれた総合大学の場の方が適しているのである。この点については、西欧の大学にもっと学ぶべきではなからうか。

## 芸術学研究科を作ってみてはいかが

今からおよそ百年前、朝日新聞記者時代の内藤湖南は「京都大学と樸学の士」(中公ク

ラシックス『東洋文化史』所収)の中で「人類の靈能を發揮し、文明粉飾の大任に当たらん」には、中央政府から遠ざかった京都大学こそが相応しい旨を主張した。实用、効率などのお題目に躍らされがちで短期的な成果に評価が傾きがちな昨今、湖南の言説を卒業生の一人として噛みしめているが、この「人類の靈能」「文明粉飾」の最たるものは芸術ではなからうか。都踊りを見て感嘆した今西錦司博士も「このような世界が科学や技術の世界とは別個に、その主体性の存在を主張している」(『自然学の提唱』講談社学術文庫所収)と述べ、音楽舞踊の背後に広がる深い主体的な世界を直観している。こうした気風をもつ京都大学に、遅蒔きながらも音楽研究の種を植えれば、先に述べた京都の豊饒な土壌の上に、京大百十一年で耕された学風を養分にして、今までに無い独特の音楽研究の大木(散木ではあるが)が育たないとも限らない。私案では、思想や歴史研究を根幹にした総合的な芸術学研究科(あるいは手始めに芸術研究センターのようなもの)を設置して、独自の研究を深めつつ、実践中心の京都市立芸術大学や内外の実演家と協力してコンサート等の企画を行ったり、学内の教養教育や研究者の養成などにあたってみては面白いのではと思ったりもする。千年の古都にある総合大学として、世界的な指揮者の朝比奈隆を出した大学として、そうした深みやゆとりと底力があって欲しい。